



Community

人と人が支え合うまち
——地域コミュニティの推進



自治協議会委員と市議会議員が 意見交換する場が大事であると思います。

Yamazaki Keio

山崎 敬雄

元新潟市議会議員
元北区自治協議会 会長



——この10年を振り返って、記憶に残っていることなどお聞かせください。

山崎 私ら豊栄市の議員になったのが平成7年です。その当時言われていたのが地方分権です。地方分権の話がいつの間にか市町村合併という流れに変わりました。

あの当時豊栄市でもやはり合併議論があり、リードしていたのは当時の小川市長でした。当初は合併の話は出たけれども、10年も20年も先の話かなと実感はあまりありませんでした。しかし実際に動き始めたらあつという間に進んだというのが正直なところです。

我々も合併の問題に取り組みにあたって、小川市長から「まず合併の大義は、政令指定都市を目指すべき」として「市町村合併は明治維新と同じで、武士が刀を捨てること」と言われ、合併特別委員会を立ち上げ議員定数などいろいろな議論を行いました。

当時新潟市は黒埼町と合併して、その後亀田、横越との合併協議に入っていました。今の状態では新潟市にただ取り込まれるだけの合

併になるから、我々もその中に入ろうということ、当時の新潟市、白根市の議長や副議長と意見交換を行ったと記憶しています。

——豊栄市は合併前からコミュニティ協議会でリードしていたのかなという感じがしますがその辺はいかがですか。

山崎 小川市長は当初から「今の国の財政状況から言っても、将来、合併はせざるを得ないだろう。それには住民自治を立ち上げなければならぬ」という考え方を持っていました。そして豊栄市では平成13年から予算をつけて、中学校単位のコミュニティ協議会を立ち上げました。

田園型政令市とか分権型政令市という理念を新潟市の合併に対して持ち込んだというのが一番大きかったのではないのでしょうか。単に大きいところに飲み込まれるのではなく、それぞれの地域があるのだからその地域の特性を活かすような形にした合併であり、それが今の地域コミュニティになつています。

は、この10年たってみていかがですか。

山崎 まだ道半ばというのが正直なところではないでしょうか。分権型にしても、田園型にしても、まだこれというものができあがってはいないと感じます。

住民参加型の組織としての自治協議会、それはそのとおりですが、参加する皆さんが行政のシステムや過去のいきさつなど知らない人たちが増えてきています。そうすると自分の専門分野であればそれ以外の意見も言えますが、それ以外の分野ではなかなか意見が言えません。

自治協議会が行政側の説明責任のありバイ工作の場になつていて、ではないかと少し危惧しています。

——これから先を考えたときに、住民の声を政策やまちづくりに反映させていく仕組みというのはどうあるべきとお考えですか。

山崎 かつては「市長と語る会」といって住民から要望を受けたり地元議員と市の職員を呼んで懇談会を開いたりしていました。今は自

治協議会委員と市議会議員が意見交換する場が大事であると思います。

——山崎さんは農業もされていますが、これからの10年農業をどのように展望していますか。

山崎 これから高齢者が増えて後継者もだんだんいなくなつて大変なことは大変ですが、むしろそれだけ農業をやる人がいなくなれば大規模化や農地の集約化はやりやすくなると思います。本当にやりたい人が農業に参入できるような形にしたほうが、農業の活性化に結びつくのではないかと思います。経営能力を持つ方が参入しやすいように国も法律の改正を進めていく必要がありそうです。

それと同時に農地の維持管理は大変です。さらに用水路、排水路の管理までとなるとなかなか難しいと思います。その辺は地域とうまく結びつけ、環境整備もきちんとできるような形にできればいいのかなと思います。

——最後に十二潟とか、自然についてお聞かせください。

山崎 私も十二潟に関わつて10年

もたつていないですが、昔は名前もない池がいっぱいありました。

以前十二潟ではハスとヒシしかなくつたのですが、アサザ、ガガブタは、おそらくここ20年か30年ほど前に十二潟に入ってきたと思われれます。アサザ、ガガブタは水深が1.5メートル以上のところでは育たないのだそうです。十二潟も昔と比べると3分の2くらい埋め立てられ、だいぶ浅くなつてきています。

潟環境研究所の大熊孝先生が「新潟は地形的に低湿地帯で、城下町のような昔ながらの文化は湊町だけ。だったら低湿地帯を逆手にとつて、ラムサール条約都市のような形で新潟を売り出したほうがよい」とよく言われます。私もどちらかと言えそうですが、私どもが、これ以上自然を壊さないためにこの辺で一旦立ち止まらないうと大変なことにならないかという気がしています。

——ラムサールも一つの自然を残す担保と言えます。ただ単に水鳥の保護ではなくて、環境を未来に引き継いでいくという取組みの象徴になると思います。

——川島さんは新潟市の合併当時
に市議会議員を務めていらつしやい
ましたね。旧豊栄市と旧新潟市の
3地区が合わさって北区となりま
したが、ご苦労されたことがあつた
そうですね。

川島 北区の一体感の醸成が課題
となつていました。旧豊栄市には文
化会館はじめ目に見えて合併の効
果が表れてきています。その一方で
旧新潟市だった松浜、南浜、濁川の
3地区は新たに北区となつても恩
恵がないのではないかと地域から
不安の声がありました。

公共交通についても同様でした。
旧豊栄市にとつては、JRがあるか
ら、バス路線やBRTの問題は遠い
存在として捉えられていたように
思います。今では、区バスや住民バス
「おらつてのバス」が北地区を運行
していますが、一体感の醸成には、ま
だ垣根があるように感じます。

そのなかで自治協議会ができ、
独自予算が生まれようやく効果
が表れてきているのではないかと
思っています。

——川島さんは自治協議会の会長
も務められました。自治協議会の



あり方について、何かお感じになる
ところはありますか。

川島 自治協議会委員はみな選
出母体が異なります。そのため選
出母体に関連するもの以外には、
関心が低いように思います。少しマ
ンネリ化してきているのかもしれ
ません。部会をより活発化するの
がよいかもしれません。基本は北
区のみ、づくりの方向性や将来に
対するビジョンを描くことが大切
ではないでしょうか。

——ところで北区は新潟医療福祉
大学が近くにあることから、学生
や若者中心のまちづくりが期待で
きますね。

川島 そうですね。どうしても北
区を中心は葛塚になるのだらうと
思いますが、何か新しい中心になる

ようなまちづくり、取り組みが必
要になつてくるのではないでしょ
うか。

——市議会議員と自治協議会委
員の双方を経験されて、地域にお
ける両者のあり方についてどうお
考えですか。

川島 私が議員になつたころは、地
域の身近な声を行政に届けるとい
う意識がありました。上水道も下
水道もなかつたし、道路も舗装さ
れていないし、学校はみんな鉄筋で
改築しなければいけない状況でし
た。行政の側も、議員が地域の代
表、地域の声を代弁してくれている
と考え、いろいろな意見を実現して
きたと思うのです。ところが今、区
長と語る会や市長ミーティングな
どさまざまあるため、議会の立場
が宙ぶらりんになつていっているの
ではないかと思ひます。自分たち市議
会議員が地域要望に応じていくとい
うことであればよかつたのですが、
その役割がだんだん薄れてくるこ
とを懸念しております。

——合併後の区の一体感が課題と
なつています。先ほども川島さんは
この点を指摘されていましてね。

川島 北区全体に関わ
る課題については、合併し
た効果は表れてきている
のではないかと思ひます。

ただ冒頭で申し上げた
とおり旧新潟市だった地
区と旧豊栄市に、施設の
な整備を含めて差があ
るの否定できません。

合併した際、旧豊栄市は
市役所が廃止され区役所になり
ました。しかし旧新潟市側は連絡
所が設置されるに留まりました。

連絡所やコミュニティセンタ
ーなど、旧新潟で整備が行なわれま
したが、やはり旧豊栄で新しいハ
ード面が充実すると、「あつちばかり
」と思つてしまうところがあるか
もしれません。

32年間にわたり市議会議員を
務めました。一体感の醸成という
課題には常に関わつてきました。

——今後10年を見据えるとき、市
議会議員や区長の立ち位置は変
わつてきたと感じますか。

川島 今市議会議員は各区選出
となつています。一般質問を見てみ
ると、個別具体的な問題に対する



各地区の位置

ものが多いです。区議会議員的
な側面があるかもしれません。

ほかの区にたとえ関わりを持つ
ようなことがあつたとしても意見
するわけにいかないため、自分の選
出区以外にあまり関心を持つこと
ができない状況があるように思
えます。

さらに区長の権限がどこまで市
長から移譲されているかというこ
とも大切です。東京特別区の様
に選挙による選出とまではいかず

とも、独自の施策を進めるため
はもう少し区に権限や財源が充て
られるべきではないかと思ひま
す。多くの面でどうしても本庁の
了解を得なければできないのが現
状ですからね。



一体感の醸成という課題には 常に関わつてきました。

元新潟市議会議員
元北区自治協議会 会長

川島 勝



豊栄という名が、今はもう駅名だけに なつてしまったことを残念に思います。

Tanaka Yasuo

元新潟市役所豊栄支所長
田中 康雄



——田中さんは区制が始まる前に、豊栄支所長を務められました。当時印象的だったことを教えてください。

田中 当時は、まず合併ありきという雰囲気があったと思います。豊栄支所長を務めるなかで、大きいことをよしとする考え方の一方で、個々の事業を重視しようという思いが私のなかに生まれました。逆に私からお尋ねしますが、北区で気づくところ、つまり北区の足りない部分はどこにあると思いますか。

——北区はコミュニティ、港、企業、市場などが充実していると思えます。足りない部分があるとすれば、それらを上手くつないでいくところではないでしょうか。たとえば子どもへの保育や高齢者の見守り、健康維持への働きかけなど、区制が始

まった10年前から問題になっていたことが顕在化してきています。今ある素晴らしい取り組み、資源を組み合わせながら課題を解決しないといけないと感じます。

田中 当時新津で開かれた会議に参加したことがあったのですが、夕方5時を過ぎるとネオンサインが多くて、まちが明るかったことがとても印象に残っています。ここは住宅地だからしかたないのかもしれませんが、でも夜になると真っ暗になつてしまうこのまちに寂しさを感

じてしまいます。ネオンサインや夜の明かりがもう少しあつたらと思うのです。夜になると人がいなくなるというか、電車から降りる人がいなくなつたら誰もいなくなるのです。自分が酔っぱらっているときはそれほど感じないけれど、会議で遅くなつた時にはつと気づくと、明

かりがないこのまちに寂しさを感じるのです。

——飲み屋さんには結構多いのですけれどもね。多いけれど少し奥まったところに位置していたり、みんな寄せ合つて建つていたりするのでなかなか見えにくいのかもかもしれません。

んね。ところで豊栄駅のロータリーには毎年10月中旬から2月くらいまで、イルミネーションが点灯されます。いま新崎駅でも周辺の新崎地区や濁川地区だけでなくもつと幅広い地域の方々に利用してもら

うため、地元の方々に考えてもらつてライトアップをしています。明るいと楽しいとか、そういうことは大事ですよ。

田中 たとえば北区文化会館のような立派な施設を活用することはいかがでしょうか。それに二生懸命取り組みことは大切だと思いま

す。当時、松浜、南浜、濁川の各地区と豊栄地区が一体感が抱けなく

なるのではないかと懸念も聞かれました。より広い意味で、北区の雰囲気としての明るさをつくること

とが大切になってくると感じます。さらに南浜地区について印象的だったことがあります。地区でパトロール隊が結成されたことです。当時犯罪被害など、治安に対する不安が住民のなかに広がっていました。警察署と連携を取りながら青色

ランプのパトロールが地域で行われるようになったのです。出発式をやつて、先駆的な取り組みだったと思います。

——「北区」という区名になったのは、田中さんが豊栄支所にいた時期だったと思います。

田中 豊栄という名が、今はもう駅名だけになつてしまったことを残念に思います。私が豊栄支所にいたときに北区という名称が決まつた経緯がありますから、慙愧に堪えませんが、しかし一方で豊栄の名を残してほしいという声があります。当

ましたが、実際そのとおりとなりました。区名決定の際、全市的に名前の募集や投票が行なわれました。このとき「北区」が圧倒的に多数でした。阿賀野川からこちら側はどう見ても北区ではないか、たしかそのような考えが多くのひとに

あつたと記憶しています。ですから、何も問題なく決まつたのです。

——北区のこれからの10年について、どう感じになりますか。

田中 やはり各コミュニティのまとまりが高いところを活かすべきではないでしょうか。北区ならではのコミュニティを中心とした、他にない

まちづくりを考えていったらどうかと思います。年代を問わず、大人から子どもまで全体的に気運を高めていくことがよいのではないかと感じます。



JR豊栄駅南口



「北区長の宝物」

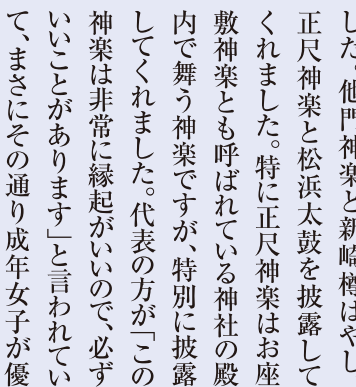
北区長をつとめて見えてきた

若林 私が北区長として赴任して
いた頃、ござれや阿賀橋の開通、北
消防署の開署、そして北区文化会
館もオープンするなど新しい施設
ができていきました。特に北区文
化会館は、今や地域の文化活動の
拠点としての役目を果たしていて、
非常にうれしく思っています。北区
フィルハーモニー管弦楽団とか地域
に根差したジャズとかファミリーコ
ンサートをやるなど、活動に広がり
が出てきて素晴らしいと思います。



2年間で一番感じたのは、北区は
コミュニティ協議会や自治会、交通
安全母の会などいろいろな団体が
あり、その活動が大変活発である
ことです。地域のためにやってやろ
うという団体が多く、個人でも沢
山いらつしやいます。柳原や下大口
を通ると、地域の方が交通安全の
旗を持つているので、毎日通るた
びに頭が下がりました。また、新潟医
療福祉大学の学生たちが住むア
パートがある自治会では、学生た
ちの歓迎会をひらいておられま
す。そういう地域があることが、北
区の一番の宝ではないでしょうか。

ことがありましたが、小川元豊栄
市長が地域コミュニティを育ててこ
られたことが大きかった。それぞ
れのコミュニティは活発ですが、旧新潟
市と旧豊栄市の部分が一緒になっ
ているので二つの地域の一体化が課題
でした。今も課題なのではないかと
思います。キテ・ミテ・キタクなど
両地域が一緒になってやる事業を続
けることが大事だと思います。



——JAも、豊栄と新潟市で合併
しました。自治振興会はまだ分か
れているのですけれども、割と相互
交流されています。商工会は別で
すが、南浜で育ったサツマイモ(し
るきーも)のお菓子を豊栄地区で売
る動きが出てきました。

新潟市北區役所

北区にはなんといつても豊かな自
然、広大な田園がある。福島潟か
ら飯豊山を見ると気持ちがあすつと
するし、トマトや焼きナスなど野菜
もおいしい。当時84歳の母親も、北
区の雪下にんじんを食べて、こんな
においしいにんじんは生まれて初め
てだと言っていました。

圧倒的な自然の恵みがあり活
発な団体や個人がいる北区です
が、区民でもまだ自分たちの地域
について知らないことが多いかもし
れません。活発に活動する人たち
だけではなく、そういう人たちが
増やしていくためにも地域をもっ
とよく知るようにするのいいと思
います。北区郷土博物館での手作
りの企画展や、北宝隊の手による
「北区のお宝ものがたり」など、参
考にできる立派な作品もすでにあ
ります。区長になった時、この本と
マップを手にいろいろと見て回りま
した。新潟市内の人がよく知らな
い北区の魅力は沢山あると思いま
すね。

——「一番うれしかったことは何でし
たか？」
若林 トキめき新潟国体の時に、
豊栄総合体育館が柔道会場になっ
たことです。成年男子が準優勝、
成年女子は優勝、少年男子も準優
勝、そして少年男子には、豊栄の生
徒が多数出ていたのです。会場には
区民の方が多く押しかけて、応援
も熱気を帯びて、今でもよく覚え
ています。大会2日目には、選手や
観客を神楽で歓迎してくれていま
した。他門神楽と新崎樽ばやし、
正尺神楽と松浜太鼓を披露して
くれました。特に正尺神楽はお座
敷神楽とも呼ばれている神社の殿
内舞う神楽ですが、特別に披露
してくれました。代表の方が「この
神楽は非常に縁起がいいので、必ず
いいことがあります」と言われてい
て、まさにその通り成年女子が優
勝。本当に縁起がいい神楽なのだ
と驚きました。

——これからの北区のために、さら
にアドバイスをいただけることがあ
ればお願いします。

若林 国の施策にもなりますが、
新潟東港についてはまだまだでき
ることが多いと思います。物流とい
うのは、政治的な関係に関わらず
住んでいる限り生じてくるもので
す。物流基地として新潟東港が発
展すれば、船員や関係する人たち
が北区の街にも練り出してくれ
る、そういう将来がくれば、最高だ
と思いますね。

また商店街活性化のために、新
潟医療福祉大学の学生たちを歓
迎する工夫が商店街にもあるとい
いのではないのでしょうか。毎日多
くの学生が豊栄駅から大学までシャ
トルバスで行き来しています。彼ら
をひきとめる「歓迎」の張り紙二枚
でも貼れば、それだけで歓迎の雰
囲気が生まれます。また大学と連
携するために区役所から積極的に
働きかけて、義足や義手などの生
産など新しい産業を育てていくこ
ともできるかもしれませんね。

新潟市シルバー人材センター理事長

Wakabayashi Takashi

若林 孝



リーダーになるような人を 何とかつかまえるのが一番だと思っ ています。

株式会社まちづくり豊栄 代表取締役

金城 道夫



——コミュニティ協議会を立ち上げた時のことについて、お話しいただけますか。

金城 新潟市との合併前のことで、豊栄市の自治会長、町内会長143名を集めて、コミュニティに関する学習会に参加したことが強く印象に残っています。市が招いた大学教授のお話を聞きましたが、非常に難しい話でして、最初は理解するのが本当に大変で、私自身も相当悩みました。

当時の小川市長も住民自治の確立に向けて一生懸命でしたし、篠田市長も分権型政令市ということをおっしゃっていました。そこへ到達するためには、我々住民がある程度知識を得ないといけないのですが、勉強も何もせずに全て役所にお任せでした。どこかの側溝が悪い、あそこにカーブミラーをつけてほしい等、このような要望はするのだけれど、自分たちの力で公園や道路の草を刈ったりすることは少なかったです。

国体の時のことですが、柔道が豊栄総合体育館で行われるのと、全国から多くの人が集まる

ことが予想されました。そのため、道路をきれいにしようと周囲に呼びかけましたが、中には「なぜ公道路を我々自治会が草を取ったりごみを拾って歩かなければいけないのか。これは当然役所がやるべきで、私たち自治会がやることではない」と言う人もいました。当時は住民による自助、共助というのが浸透していなかったのでしょうか。

合併前、小川元市長が私たち自治会長を集めて話をしました。当時の豊栄市の自主財源が全体の48%で、他は全て国から来る金であると。合併しなければ補助金等がだんだん削られていって、5年後にはほとんどゼロになってしまうというのです。それを聞いたときは自治会長、町内会長もある程度理解しました。すべてを行政に任せるのではなく、自助努力や勉強をし、言うべきことは言って、自分たちで切り拓いていかなければならないと感じました。

豊栄市の頃、143自治会がやっていたのは親交的コミュニティでした。親交的コミュニティは、お互いに仲良くしよう困りごとをみんな

相談しながらやっていこうというものです。行政が考えているのは、もう1歩進んだ自治的コミュニティなのです。どうすれば自分たちの生活環境がより良くなるのかは、自分たちで考え、多少のボランティアがあっても自分たちで行動する、というものです。もちろん、地域の絆を強めるためには親交的なコ



ミュニティ運営も必要で、自治的なコミュニティ運営とのバランスが大事だと思っ

今度、葛塚連合で新潟交通のバスを貸切って視察研修に行くのですが、費用は全部コミ協持ちです。葛塚地区には将来のコミュニティの育成のためにと積み立てているお金があるのです。コミュニティの育成資金などは役所に頼んで補助金を

もらえばいいという意見がありました。しかし、お金が絶対に必要となることは分かっていたため、これだけは譲れませんでした。親交的なコミュニティをしようとすると、どうしてもお金がいるのです。

行政も無限にお金があるわけではないので、ある程度公助があったとしても、やはり自分たちの生活環境をよくするためには、自分たちも汗を流さなければいけません。

話は変わって葛塚の市ですが、課題の二つに後継者の確保がありま

——海辺の森でコミュニティビジネ

スをやって、松ぼっくりで盆栽とか、いろいろなものをこれから売り出そうと。

金城 いいことですよ。カブトムシも売るそうですからね。最初から大きいことではなく、小さいことから少しずつ積み重ねていければよくなつていく思っ

——最後に二つ。コミュニティのこれからについて。親交的なコミュニティの考え方と、自治的なコミュニティの考え方。これから10年を展望したときに、行政側も地域側も、どの辺にバランスを取りながら将来のコミュニティを思考していけばいいと思っ

金城 私が思うのは、やはり人だと思っ

——いまどのようなテーマに取り組んでいらっしゃいますか。

里村 「暮らし」をテーマとして活動していて、中でも特に「農村の暮らし」に着目して取材を行っています。

今、私がとても興味を持っているのが新潟市の農家の人たち、特に若い農家の奥さんたちです。「母ちゃんの会」というものを作って先進的な取組みをしているので、私も取材を兼ねて寄せてもらっているのです。農業そのものも無農薬や自然栽培を目指すとか、農産加工品としてクッキーを作ったり米粉でいろいろなものを作ったり、漬物でも非常に工夫していらっしゃいます。

かつての農家の嫁は、農作業がきつい、嫁姑問題、同居問題……といういろいろな問題があったのですが、そういうものを通り越して自分がどういう農業をしたいかということに對してとても前向きなのです。失敗してもよくよくない、どんな方法があるかを考え後ろを振り向かずに進んでいく姿は教えられることが多くて、私も今参加させてもらっているのをとても楽しみにして

います。みなさん非農家から嫁いできたのです。農業をしたくてそこに来たということもあって、意気込みがすごいのです。

メンバーの中には北区民も多くいますので、そういう人たちを見てみると北区の農業の可能性を感じます。日々の暮らしの延長なのですけれども発想が面白いのです。大きな意味ではTPPや日本の農業云々という問題はありますが、今自分はここで暮らしたいのかというところで、しっかりと自分の足立とうとしていく人たちがいるというのを、いつか文字にして記録に残しておきたいなと思っています。

一方で従来農業に携わっていた方が高齢化していて跡継ぎもいないという状況もあり、それは農村だけの問題かと思っていたら自分の身に降りかかっているという現状があります。

——北区の場合も長浦岡方地域のようには、いわゆる農村部があつて若い奥様が出てきて、新しい取組みをしながら変わってきている。一方で高齢化が進み、跡継ぎもなく自分たちの代で終わりだとされている

方もいて、けっこう厳しくなつてきているのかなと思いますけれども、その点はいかがですか。

里村 私が住む早通でも空き家や空き地が増えてきています。全国的な少子高齢化は、北区でも例外ではありません。それを認めて、さてどうしようかということをお私たちはこれから考えていかないといいけません。



そのときに私が今とても大事にしたいなと思っているのが、お互いに地域の隣近所、面倒を見るまでいなくてもいいから、とにかく交流しておく、助け合う。それがとても大事になってきているのではないかなと思うのです。

農村地域だと、仕事の手伝いからお葬式から助け合わないとやっていけないかたというところもあり、

例えば人口が減少したとしても「結」という相互扶助が残っているのです。問題は新興住宅団地で、例えばお年寄りが一人残されているおうちだと、何かあつたときに働いている若い世代に連絡したほうがいいのか、どこに勤めているのか？電話番号は？と聞いても、やはり嫌がられるのです。しかし地域づくりにおいてもお互いに何となく敬遠していたものが、今はいい方向に行くために話し合うという空気が少しずつ出てきています。プライベートを大切にしている風潮の中で自分たちが目覚めない限りは難しいと思います、少しでも交流を通して顔見知りになることで、また全然見方が違ってくると思います。

課題はありますが、私はここを離れる気は全然ありません。お医者さんもありますし、ガス水道電気のインフラは非常にいいですし、早通はJRに近いので交通の便もいいです。文化的にも、イベントはみんな一生懸命行われていますし、地域の人が参加するものは聞くほうも応援しようという気持ちで聞かれています。北区の交響楽

団や北区音楽祭で文化会館にあれば人が入るといえるのは珍しく、10年でとても大きな進歩だと思います。

——北区の農村の風景で一番お薦めというか、一番気に入っているところはどこですか。

里村 自分が住んでいるところにはナンキンハゼの並木があつて、その向こうに三王子岳が見える通りは私のお気に入りです。秋には紅葉しますし、紅葉が始まった頃にちょうど山のほうが初冠雪で白くなるというとても良い風景です。また新井郷川は昼間見ると少し泥水なのですが、夕暮れに見ると水面が鏡のようになりそこに映る夕陽がとてもきれいなのです。冬になればいつもうちの台所の上をヒシクイや白鳥が飛んでいきます。鳥たちは何をおしゃべりしているのかなと思いつつ、晩御飯の支度をするのが楽しみです。そういった心動かされる風景や瞬間がたくさんあると思いますし、私はそういうものを見つけたのが好きです。そういうものをみんなで大事にして、自慢していけるといいですね。

区 interview 長

心動かされる風景や瞬間を みんなで自慢していけるといいですね。

エッセイスト／新潟市北区郷土博物館協議会委員

Satomura Yoko

里村洋子



大事なことは親が我が子に「いい先生に受け持たれてよかつたね」と言うことです。

元コミュニティ木崎村会長
Terao Sadao
寺尾 貞男



——コミュニティ協議会について教えてください。

寺尾 最初にコミュニティ協議会を作りなさいといわれたのは平成13年でした。そのとき木崎地区全世帯にアンケートをしました。アンケートの結果、一番必要なものが「安心安全な地域」であるという結果でした。

当時コミュニティという言葉も分からない時代でしたから、豊栄市の職員から毎日のように二人、場合によっては三人派遣してもらって、どうやってコミュニティを作るかの話し合いを行いました。

部会をいくつにするとか、サークル部会がいいとか、総務部会がいいとか、安全部会とか、防犯部会とかいろいろ案を出して検討してきました。そしてようやく形になったと記憶しています。

サークル部会は、山と魚釣りです。魚釣りの会で地引き網をしましたりして参加者を集め交流を深めてきました。何回か進めていくうちにサークル部会の山の会「山友会」と釣りの会「釣友会」ができました。しかし、今ではサークル部会は山の会だけとなっています。

——「コミュニティ木崎村」という名前はどういうようにして決まったのですか？

寺尾 合併当時、新潟市に57のコミュニティができました。その中で村というのは木崎だけです。コミュニティ木崎村にしたいと私が提案したのです。

昔は、猫がその辺に死んでいるなんていうと、隣の父ちゃんに頼めばすぐに処分してくれました。蜂がいたといえば蜂を駆除してくれました。お互いに助けあっていた。今は何でもあるけれども何かがないと。昔は何でもなかったけれども思いやりがあったと。思いやりがなくてはいけません。そういうことを言いましたら、賛成だとみんな聞いてくれて、コミュニティ木崎村になったのです。

——助け合いとか思いやりとか大切なことですね。

寺尾 コミュニティセンターの建築時に木崎中学校から学校とコミセンを区分するフェンスが必要であるとの意見がありました。学校と地域が一緒になってはじめて子どもを守るができるという考えで、フェンスを設置しませんでした。

学校と地域がスクラムを組んでいけばきつとくまうきます。木崎の人たちにとっても、そういう地域になることが理想であり学校としても必要なことだと思います。一緒に考えたり話をしたりしてお互いに協力して頑張っていけば、きつと子どもにとっても良い状況になると思います。これから育つ子どもが大事なのです。



——その後木崎地区芸術文化祭とか運動会とか、そういったことも一緒にスタートしましたよね。

寺尾 昔から木崎地区は運動が盛んな地域です。学校のグラウンドを借りて運動会を開催しました。各集落でのぼり旗を作つて選手も応援団も行進しました。

——合併して政令市になって、北区全体の一体感という意味ではどうですか。

寺尾 私はコミュニティの役員をし

ていましたからどこへ行つてもみんな私を知つていてくれました。松浜地区の知り合いが亡くなつてお通夜に行つても「こっち、こっちに座つて」なんて言つてくれたり、顔見知りとか心打ち明ける人がいっぱいいます。

葛塚でも簡易保険の「会員の会」の役員をやつていたため、本当に顔見知りが多くできましたね。いい人生というか、ありがたいと思つています。「元旦歩こう会」へ行く

と多くの方からあいさつを頂きます。幸せ、感謝です。

——これからの10年、木崎地区、北全区全体の10年、どんなところが課題というか、改善点と思いませんか。

寺尾 私は笹山の自治会長を10年やりましたが、今のコミュニティ木崎村小林会長にはコミュニティの立上げからコミュニティセンターの建築設計にご協力頂きました。これからも長くコミュニティ会長を務めていただきたいと思います。

そして、これからもつと学校と地域を一緒にしていくことが大事です。先生は人事異動で替わつていきます。3月になると先生の人事異動が新聞に載ります。私は大切に

それをとつておきます。

私の母親は先生が大好きな人でした。先生と立ち話をよくしていましたね。あのころは親が教室へ入つてきて見るなんていうことはほとんどない時代でした。私の母親は米の配達に行つた帰りに学校に来るのです。そして、先生を信頼していましたね。親の気持ちが子どもに伝わるのですね。

大事なことは「親が先生を尊敬する」とことだと思います。「いい先生でよかつたね」と。以心伝心で、親の気持ちは子どもに伝わります。私は母を絶対信頼していますから、その母親が先生を信頼するならば、いい先生に決まっています。

母親が先生を尊敬するにはどういう方法がいいかと考えますと、先生は大事で絶対的だということ。それをなくお話しする。そうすると、だんだん先生を尊敬する母親がいつか出てくるわけです。そうすると、子どもたちもだんだんと先生を尊敬していきます。

学校と地域が一体になって子どもを育てていくことができます。10年、20年後には素晴らしい地域になると思います。

——今までの10年を振り返っていかがですか。

池田 今から6年くらい前でしょいか。長浦地区に青色防犯パトロールを最初に導入しました。

豊栄南小学校区の子どもたちは原っぱを歩いて通学しています。不審者が子ども連れ去る犯罪の発生が考えられます。歩いての防犯活動には限界がありますので、青パトを導入して、車で回ろうということになりました。

川西地区では今、毎朝光晴中学校と葛塚小学校の登校時に子どもたちが交通事故に遭わないように、交通安全誘導を行っています。しかし、私もいつまでやれるかわからないので、次の世代にバトンタッチしていかなければと思っています。

もう一つ、今私を取り組んでいる高齢者支援についてお話ししたいと思います。私が自治会長になったときに、お年寄りは少なかったですが、これから先の10年後、地域にお年寄りがいっぱいになります。

今、行っている支援は、まずゴミ出し支援です。足腰が悪くてゴミ出しに行けない人の代わりに、無償で

ゴミ出しをやつてあげるというものです。そして、お医者さんに連れていくことです。9月から始めましたが、月に約15人を医者につれて行つてます。そして、買い物のお手伝いです。これは、週に二、三回のペースで行っています。

お年寄りの方に「何をしてほしいですか」と聞くと、やはり「病院に連れていつてほしい」というのが一番多い要望です。デマンドタクシーもいけれども、ややこしいというか、面倒で乗りにくいとのこと。

自治会では、私を含め5人でお年寄りの送迎を行っています。また、その他の高齢者支援事業を8人で行っています。私たちはこれらの人たちを「見守り隊」と呼んでいます。そして、月に4回のサロンを開催しています。自治会ではお年寄りの半数の方が参加しており、残りのお年寄りについては「見守り隊」が安否確認を行っている状況です。

区長にお願いしたかったことがあります。それは待機児童のことです。

——保育園ですか。

池田 1歳未満の子どもについて、



川西地区交通安全運動「人間のぼり旗」

どこの保育園でも「保母さんがいない」という理由で受け入れていただけかもしれません。子どもを安心して預かってくれるところがあれば、子どもを産むと思います。お年寄りは増えていきますが、それを支えてくれるのは子どもたちだと思います。子どもをどんどん産める環境づくり、子どもを育てる環境づくりがこれからは重要だと思います。

——先ほど言われた高齢者の移動の問題についてですが、これからも高齢者が増えて行く中で地域の人たちの間で協力し合っていく形が一番安心できるということですか。

池田 地域の住民には地域で協力しながらやっつていこうという意識が

あります。

今は、高齢者が高齢者を支えていく形になっています。これからは若い人がもつと新しいアイデアを出しながら、どうやったら高齢者を助けていけるかということを考えていくことが重要です。私の自治会では副自治会長などは若い人に代わつていきます。その次の人も今から育てていこうと思います。

これからの10年を考えると、今動ける高齢者も足腰が悪くなつてきますから、ごみ出し支援事業などの要望が出てくると思います。

それと子どもたちの登下校時の除雪の問題があります。昨日川西地区自治会の協議会で「ひとかき運動」について、社会福祉協議会から依頼がありました。この取り組みのようにみんなで支え合っていくことが大切です。色んな活動が目で見えるようにしておかなければならないと思っています。

——お聞きしたいのですが、合併して新潟市になって、北区になりました。その時の期待とその後10年をどのように見られていますか。

池田 一つは、合併して期待したの

は、中央環状線の早期完成と光晴中学校前の道路の拡幅です。平成31年くらいには光晴中学校の前の道路が拡幅されると言っていましたから、これはありがたいと思っています。

また、水害対策の福島潟放水路と潟周辺の高上げ工事です。新井郷川のほうに水が来ないように環境と人間のふれあい館の前に堰を作れば、あとは放水路のほうに流れますので住民の安全が図られます。これが早めにできればいいなと思っています。安心して安全なまちができればこれからの子どもたちも北区に住んでよかつたと思えると思います。

こういうものがこれから10年先、今いる子どもたちが大きくなつてやはりここが一番いいねと言つてもらえる基礎だと思っています。

新潟市と合併するとき長浦コミュニティセンターを新しく作つてくださいとお願ひして、それからもう11年経ちます。これからの10年はコミセンが地域の拠点となつて、防犯、水害などに対応したまちづくりができればと思います。



安心で安全なまちができれば 北区に住んでよかつたと思えると思います。

Ikedata Saburo

川西三丁目自治会 会長
池田 三郎



区政施行 10周年を迎えて

北区自治協議会 会長

倉島 敏弘

Kurashima Toshihiro



ある一方、従来からの自治会組織とコミ協でそれぞれの活動分野で種々関わりを持ちながらコミ協とその事業分野の棲み分けを認識しつつ、依然としてその組織ごとに活動している地域が存在している。

このように活動母体の組織が違っても、地域活動の各分野においてかつての行政主導とは異にする「協働」という施策により、市と市民、地域が対等の立場で組織や活動の活性化を図り、市民のニーズに沿った行政サービスが受けられる体制づくりができたことはかつてない画期的なことだと思ふ。

新潟市は、平成19年4月に日本海側では初の政令指定都市となり、同時に区制を施行し、阿賀北に位置する当地区は旧新潟市北地区（松浜、南浜、濁川）と旧豊栄市が一つの区として位置付けられ、新生北区として誕生して以来早くも10周年を迎えた。

これより2年ほど前、市主導で市民と市が対等の立場で「協働」してまちづくり等に参画、市民自治の推進を図る組織として市内各中学校区にコミュニティ協議会（以下コミ協）が創立された。今は旧来から地域活動の母体として自治活動の中心的役割を果たしてきた自治会組織と新生コミ協が統合して、ひとつの地域コミ協を結成して、活発な活動を実践している地域が

悠々と流れる阿賀野川と鮭、シジミ、アカヒゲ、ヤツメウナギ漁、そして季節によりその姿を変える日本海の夕映えや荒波、春季の濃緑から秋の黄金色に変化する田園風景など素晴らしい自然の光景を目にして、この地に生活できることは本当に幸せなことだと思ふ。

今や全国的に押し寄せる超高齢化そして人口減少などの社会問題は、当北区に於いても例外なく押し寄せて来ており、区制施行10周年を迎え市民と市が「協働」の名のもと、北区全体で持続可能な街づくりが進められ、誰もが住みたくなる街として発展することを願いたい。

松浜まつり



住民自治の 深化に向けて

元新潟市北区長
北区社会福祉協議会 会長

藤田 清明

Fujita Kiyooki



員を、また、自治会の役員も経験した。そこでぼんやりと見えてきたものがある。自治協議会とコミ協、コミ協と自治会の連携不足や役割が不明確であるということである。

少子高齢化、人口減少の中で安心して生活するためには、地域の中でお互いに支え合うような住民自治が必要である。

なんでも行政に要望する時代は終わった。住民自治の向上のため、次のことを提案する。

①各コミ協単位の将来像（計画）を、女性や若者の参加を得て策定する。これを契機に女性や若者からもコミ協活動に参加してもらい、人材確保育成につなげる。また、自治会やコミ協等の役割が確認できる。

②計画の実施状況を評価する基準を作る。評価を通して成長度合いを確認し、次の課題解決のための事業に移行できる。

③行政は、計画や評価基準を作成するノウハウや地域で起きている孤独死、児童虐待、貧困や空き家問題等の情報を住民自治組織に積極的に提供する。

行政には、コミ協に対して助成金での支援のほかに、今以上に職員が地域に飛び込み、住民自治深化のために住民と手を携え歩む、そんな「協働」の姿を望む。

合併前の豊栄市では、幾つかの自治会と各種団体が構成するコミュニティ協議会（以下「コミ協」）が設立されていた。各コミ協で、まず顔見知りの関係を築くための運動会、文化祭など親睦的な活動から始まり、次に、防災・防犯・交通安全等の自治的活動が比較的短期間のうちに活発化した。

さらに、地域の課題「少子化のもとの子育て」「高齢者の生きがいと安心をつくり上げること」「地域から地球規模につながる環境のこと」等にコミ協と行政が協働で取り組めば、暮らしの質の向上につながる、そんな思いで、合併後の新潟市では高齢者福祉課、中央区健康福祉課、秋葉区、北区で与えられた立場でコミュニティ活動の重要性を語ってきた。

退職1年後には行政と住民の「協働の要」という自治協議会の委

13市町村の合併を経て、政令指定都市に移行して10年がたったが、今、一番思うことは、北区では合併効果は旧豊栄市地域にあったということ。ライフラインである道路、側溝、歩道からコミュニティセンターに至るまでそうだった。その集大成が北区文化会館であった。

合併により通常なら30年くらいかけて実施される事業が、10年くらいで実施された。それ自体はよいことだと思っている。ただ濁川、松浜、南浜地域は、その恩恵が少なかったのが実感である。すべての地区が公平に整備されるべきだった。

10年間で心に残る一番大きな出来事は、新庁舎問題だった。人口面や地理的にも豊栄駅北側が北区の中心であったが、最終的に旧豊栄市街に建設することになった。区役所でも決定に至るまでに、地域の意見もよく聞いてくれていたが、最終的には市長の決定だった。そこが残念だった。将来性を考えると豊栄駅の北側が新庁舎のよりよい立地であると今でも考えている。しかし決定したからには、全面的に協力したいと考えている。

区政で重要な問題が、本庁で決まっている。地域にもっと決定権を持たせることが大事と思う。これが発展につながる。もう少し地元、区長の周辺で責任をもつ体制にす

べきと考えている。

一方区の職員の対応、仕事ぶりには本当に感心している。区長以下で和ができていくことのあらわれだと感じている。これだけの職員がいるのだから区役所の決定権を大きくすべきだと思う。

心配している点はこの10年間で30年分の事業を実施したため、その反動でこれから停滞しないかということ。その反動を少なくしながら、二層区政を発展させていくことが大切と考えている。



濁川自然生態観察園

地域と区に決定権を

濁川地区コミュニティ協議会 会長／北区自治協議会委員

Akama Matsuji **赤間 松次**



鶴巻 ヨシ子 Tsurumaki Yoshiko

新潟市食生活改善推進委員／新潟市運動普及推進委員



住み慣れた町で生き生きと

私は北区の地域に馴染み、これからの生活を楽しみ、過ごすきっかけになれば、との思いで、平成17年度食生活改善推進委員と運動普及推進委員の養成講座を受講しました。家族が健康である為、そして友達作りをしたいという思いで活動しています。

新潟市食生活改善推進委員は「私達の健康は私達の手で」をスローガンに活動をしています。本年度創立50周年という歴史のある団体で年々活動の範囲も広がっています。毎年葛塚小学校地域文化祭では、親子調理教室を行っています。普段忙しい毎日の中で調理を介して少しの時間でも親子のコミュニケーションを取るきっかけになつていると感じます。

また新潟市運動普及推進委員として、運動を通して地域で誰もが生涯に渡り健康で生き生きと自立した生活を送れるよう、健康づくりや介護予防の活動を行っています。

地域の茶の間ではタオルを使った体操やゲーム等の運動を参加者の方と一緒に、私自身とても楽しく活動をしています。

4年程前から毎年声をかけていただいているお茶の間グループの活動を紹介します。

初めて伺った時、足の指をグー！チヨキ、パーと動かす体操やタオルを

床に広げ、足の指でタオルの端からたくし上げるように動かす運動をしましたが、皆さん上手くできませんでした。皆さんからは、「若い時できたのに今はできなくなつてしまった」と少しガッカリした声が聞かれました。「毎日少しずつ練習をすると出来ますよ」とアドバイスをして帰ってきました。

1年後に伺った時、メンバーの男性から「できるよになったよ」と嬉しそうに声をかけられました。1年前はできなかった足の指でタオルをたくし上げる運動が上手くできるよになつていました。私もとてもうれしかったです。私達の小さな活動が伝わり、出来ることへと繋がっていったのだと思いました。

このように小さな活動の積み重ねで、地域の皆様がいままで生き生きと元気に過ごしていけるきっかけになればと思います。これからも活動を続けていきたいです。



松浜こらぼ家での体操教室



□□モ予防体操講座

⑤のことなどについての勉強会を開催しました。

①まちづくりセンターとは何か

②まちづくりセンターは何を行うところか

③新潟市による支援の充実とはどのようなことか

④運営方法や会計処理はどのようなものか

⑤自治振興会やコミュニティ協議会との関わりはどのようなものか

以上の勉強会や検討会議を経て平成25年4月1日に南浜まちづくりセンターの開所式を挙行しました。

南浜地区コミュニティ協議会は、平成17年8月19日に結成され、今年で12年目を迎え、その間各部署はいろいろな事業を行ってきました。

新潟市から南浜地区にも「まちづくりセンター」を設置し、地域づくりの拠点として機能の充実を図つてはどうかというお話があり、平成24年4月1日に「濁川まちづくりセンター」が設置されました。

当コミュニティ協議会は、神田義秋会長の元に平成24年6月から平成25年3月の間に役員会議8回、理事会2回の会議に合わせて①～

現在は3人の職員が協力してコミュニティ協議会事業を主体に自治振興会・防災訓練・地域運動会等の各種団体の業務支援を行っており、まちづくりセンターの運営は軌道に乗っていると感じています。

今後の課題として、コミュニティ協議会事業の充実、少子高齢化に対応する会員の確保、コミュニティ協議会への既存事業の整理統合、コミュニティ協議会と自治振興会の統合による組織のスリム化、事業の拡大等があります。これらの課題等を解決し、コミュニティ協議会事業に地域の皆様が進んで気軽に参加ができるよう取り組んで行くこととします。

地域づくりの拠点、南浜まちづくりセンター

南浜地区コミュニティ協議会 会長

Abe Yasuo **阿部 康夫**



小林 勝 Kobayashi Masaru

コミュニティ木崎村 会長



コミュニティ木崎“村”名称の由来と先人の功績

コミュニティ木崎村は発足から18年目に入りました。私は、コミュニティに関わつて13年目になります。今から12年前、まだまだコミュニティという言葉の意味や内容等が理解できない自治会長が毎年何人かいて「何でこんな仕事、行事をしないでならないんだ」と文句を言っていました。

そんな中、コミュニティ木崎村初代会長寺尾貞夫氏、伊藤力センター長を中心としたコミュニティの役員の方々が、安心安全な地域づくり、温もりがあり支え合える地域づくり、地域の宝である子どもたちの健全育成支援という大きな目的理念を掲げ、自分たちの地域は自分たちで良くしていくんだという熱い思いで、本気でコミュニティづくりに取り組んでいました。

その熱い思いを「村」という名称に入魂し、「木崎コミュニティ会議」から、「コミュニティ木崎村」という名称になりました。それと同時に木崎コミュニティセンターの老朽化に伴う移転新築という課題に対し、上村秀男会長を中心とした建設委員会を立ち上げました。新コミュニティセンターの建設に着手し、

計画から三年の歳月をかけ平成21年3月に竣工しました。その時困つたのは、新潟市合併建設計画で人口に対するコミュニティセンターの建



木崎コミュニティ健康体操講座

設可能面積が決まっていた、計画した面積が百平方メートル足りなかつたことですが、地元木崎地区市議会議員で今は亡き木村文祐氏のご尽力のおかげで計画通りセンターを建設することができました。センターのロゴマークは、当時コミュニティの総務部会長であり、美術の先生を歴任された野俣正樹氏に依頼し、木崎中学校の校歌の中にも歌われています。梨の花をイメージしたマークを考案していただきました。今では、センターのシンボルマークとなっています。

本当に先人の熱い思いと、魂の入ったコミュニティセンターが、地域の宝である子供たちを見守りながら、木崎中学校西側に建っています。

人口81万人となった平成の大合併。大きな課題の一つに「合併後のまちづくり」が上げられました。

合併時のまちづくりの基本方針は「住民が行政に参加しやすい仕組みづくり」を目指すとして、地域コミュニティ活動を核とした住民自治を育て、住民と行政が手を携えて協働のまちづくりをすすめることとありました。

旧豊栄市では平成12年「地域コミュニティ育成事業」を創設。各コミュニティ当たり300万円の自主活動費、各コミュニティセンターの自主管理、コミュニティバスの配置などの事業をすすめてきました。そして事務所と専従職員(嘱託、補佐員)を含む運営費3億円を計上、さらなる育成を図ることとしました。



早通健康福祉会館における異年齢交流

見ると、現在99のコミュニティ協議会が結成されていますが、期待された活動が思うように進んでいないのが実情ではないでしょうか。合併時の「まちづくり」の基本方針が生かされていないことは非常に残念です。行政の取り組みの強化を強く求めたい。

コミュニティ活動で特に留意すべき点は住民の一体感の醸成です。

早通地域も近年、高齢化が進み救急車の出動や孤独死が増加の一途をたどり「多世代の交流の場」の要望が強まっています。

4年前、早通コミュニティ協議会と早通地区自治会連合会が主体となつて住民アンケートなどを実施。家に閉じこもらず、楽しく過ごせる環境を整え、住民が施設の運営と交流を楽しみながら、介護や認知症予防を目指すことを目的に「早通健康福祉会館」の建設を進め、平成29年4月、オープンしました。建設資金は、早通地区の各自治会を中心に地元の医療機関、商工会、個人などからの寄付金と新潟市の補助金を充て建設したものです。

地域住民が「支えあう」ことがまちづくりであり、普段から地域の中で「顔の見える関係」があり、時には地域の行事に参加し、仕事や年代を超えた関係がこれからの「まちづくり」ではないでしょうか。

顔の見えるまちづくり

早通地域コミュニティ協議会 会長

Shimizu Hiroyasu 清水 博恭



土佐 美之 Tosa Miyuki

まちづくりセンター事務員／芸術家



世界一優しい新潟が展望に繋がる

ある日、駅前を歩いていたら自転車に乗った男子高校生が私を追い越し、前を歩いていた杖をついた目の不自由な方も追い越して信号の前で止まっていた。その杖をついた方がその後ろを通ろうとする間、高校生は自分の自転車の後輪がぶつからないかとずっと見守っていた、その思いやりの姿に心が温かくなり涙が込みあげ、とても素晴らしかった。

建築が大好きで、19年前にヨーロッパをバックパッカーで旅をした。ゴシック建築、ガウディ、マテイス、モーツアルト、「ハイジ」など教科書とテレビでしか観たことがなかった芸術に触れてきた。その中で感じた事は、自然の美しさ、そして笑顔と人の優しさに勝るものは無いということ。

ゴッホの跳ね橋を観に行つた帰りのこと。何時に来るか分からないバスを待ち、周りには何もなくて物凄く風と寒さ……(涙)。その時、清掃の方が通りかかり、町まで乗せてくれた。嬉しくありがたかった。跳ね橋は何分かで観終わるが、人の優しさは今も一生心に残る。

ユースホテルで一緒だった東ドイツの女の子。たった1日しか一緒でない、全然知らない私に対して、旅で困ったら、お金でも何でも言ってくると……その優しい心。又、日本語が聞

きたいと言われて、日本の本を読んだら、日本語は美しいと褒めてくれて嬉しかった、その言葉と心は一生の宝物。

市町村合併になっても変化を感じていなかった。コミュニティ協議会と自治会が、地域の為に自分の時間を使い一生懸命やってくれている事を、まちづくりセンターに勤めなければ分からなかった。回覧板も見ずに次へ回した事など、今反省の日々。

人にとって時間はとても大切、そして優しさ。無理に何かをするのではなく、誰でも出来る思いやりで、新潟は世界一優しい所になれば良いと思う。素晴らしい所と皆が来てくれると信じる。



土佐さんの創作したキャラクター作品



葛塚コミュニティセンター

地域コミュニティ葛塚連合は、葛塚地区54自治会の約7800世帯で構成されており、その歴史は平成13年にさかのぼる。

平成13年に、コミュニティ組織の立ち上げのための研修講座を開催し、葛塚小、葛塚東小、太田小の小学校区単位の国(コミュニティ)づくりが行われ、葛塚ポンプンあしはら国、やまたい国、太田拾國の三国が創設された。そして平成14年7月には、三国を束ねる葛塚連邦の建国記念式典とコミュニティパスの出発式が豊栄地区公民館で華々しく行われたのである。

平成21年、時代の変化に対応して葛塚連邦規約を改正し、名称を葛塚連合に改称して、三国はそれぞれに葛塚中央コミュニティ協議会、葛塚東小学校区コミュニティ協議会、太田ちいきコミュニティ協議会に名称を変更し、翌年に部会組織も改編した。

平成25年度末には、平成26年度からの葛塚コミュニティセンターの指定管理制度導入に向けた組織改編で、地域活動の中心的な役割を果たしてきた葛塚地区自治会長連絡協議会を葛塚連合に統合することを、臨時総会において全会一致で円満に承認されたことは印象に残ることである。

新潟市内の全区に先駆けて葛塚地区に創設された地域コミュニティは、先輩役員諸氏の労苦によって3コミュニティ協議会が、地域防犯と環境整備、福祉文化事業等に独自の活動を組み入れて着実な歩みを進めている。地域活動は各自自治会の活動が母体になっているが、高齢化・少子化社会における多くの課題解決に向けて、地域住民同士が互いに支えあい協力し合って安全な住みよい地域づくりをいかに構築していくか。こうした現状に対して、葛塚連合はより一層地域活動の推進的な役割を果たしていくことが重要であると思っている。

コミュニティ協議会—地域活動の推進的な役割を

地域コミュニティ葛塚連合 会長

Matsuda Masami **松田 正實**



山賀 好郎 Yamaga Yoshiro

長浦コミュニティ委員会 会長

誰もが住みやすい地域を目指し

私はコミュニティ協議会が行政や学校との連携、防犯・防災、生活環境の改善、イベントの実施等幅広く精力的に活動をしている事を自治会長になって始めて知り、驚き、感心しました。

中でも長浦コミュニティ委員会は自治会を超えた交流を図る歌や踊りの催し、スポーツの集い、文化祭や様々なサークル活動が大変盛んです。

特に、平成20年に舞台付ホールや大小の会議室を備えたコミュニティセンターが新築され、事業の開催数、種類も激増し、ホールは常に満員で時には300人を超える事もあります。又、平成29年7月には地域内の建設会社山下技建さんから立派なステーションを寄贈され、今後のイベント、催しの益々の充実、活発化が期待されます。

コミュニティセンターの新築と並ぶ大きな出来事として、施設の維持管理が平成26年から指定管理者制度に移行しました。残念ながら制度の良さを十分生かしきれていないのが現状です。特に、コミュニティの活動や管理費の一端を担う貸館事業は主として立地条件に起因して実績が上がらないため課題となっています。

長浦地域は若者の流出、急速な



長浦コミュニティセンター

高齢化、公共交通網の未整備等の大きな地域課題があり、更に古くからの農村地域と新興住宅区域とに概ね二分され、その風土、特性が異なります。この対応には各自治会が相互に尊重、協力、理解し、地域が一体となり行政や関係機関と連携する事が不可欠で、コミュニティの果たす役割は二層重要となっています。

かつて豊栄は、日本二住みやすいと言われておりました。長浦地域が誰もが住みやすい地域になる事を目指し、コミュニティ活動を各自治会、住民の自発的参加で二歩二歩進めていきたいと思っております。



十二潟

ています。十二潟はかつて阿賀野川が蛇行して流れていた跡に残った面積約6ヘクタールの三日月湖で、農業用水として利用されており、10年ほど前に植生や生物調査をした結果、豊かな生態が確認されました。

このため「地域の宝」として地元岡方地区コミュニティ委員会と行政が連携して保全活動に取り組んできました。不法投棄されたゴミを片付けたり、栈橋を作って観察用地を整備したりして、平成29年5月に岡方地区の自治会長等の協力により特定非営利活動法人「いるこ十二潟を守る会」を設立しました。

今後は、岡方コミュニティ委員会と「いるこ十二潟を守る会」が連携し、活動を進めていくことになりました。

岡方地区には、広大な水田やとうとうと流れる阿賀野川の川辺、十二潟、天然記念物の高森のけやき、大久保のけやきなど豊かな自然が残っています。また、豊かな農耕地と古い伝統を持つ岡方は教育にも熱く、明治期に幾多の私塾が開かれ、今の岡方第一小学校、岡方第二小学校、岡方中学校の元となりました。このような自然・歴史に囲まれ生活している私たちは、この自然を守り次世代に引き継いでいこうと活動を進めてきました。



はさ木と花の岡方街道

地域の宝「十二潟」

岡方地区コミュニティ委員会 会長

Watanabe Masahiro **渡邊 正廣**



五十嵐 隆吉 Ikarashi Ryukichi

葛塚東小学校区コミュニティ協議会 会長



知恵と力を出し合って課題に向き合う

新潟市と合併し、政令指定都市に移行した頃、葛塚東小学校区コミュニティ協議会は「やまたい国」と称していたが、平成21年度に現名称に変更した。当初から当地域内に自然豊かな福島潟があることから、自然環境や地域のたからものを大切にしながら安心安全に暮らせる地域を目指して活動をおこなってきた。



福島潟自然文化祭

この間その時々時代背景もあり、当時葛塚中学校に置かれ直営だったコミュニティセンターの管理運営が指定管理者制度へ移行することに伴い、現在の葛塚コミュニティセンターに移動しコミ協で指定管理を行うことになったことは、今後のコミュニティ活動に対する不安もあり大きな出来事であった。

活動を行ってきた中で特に印象的なことは、さくらウォークや夜回り先生水谷修氏の講演である。3年に一度の地域防災訓練においては「命を守る防災対策と行動」の視点から行われた、中央で活躍の山村武彦氏からの講演が印象として残る。

また青少年育成の面で、恒例となつている「コミュニティの日」の取組については年々参加者も増加し皆様のご理解が深まっていると感謝したい。

もう一つ印象的なことは、毎年地域、学校とともに取り組んできた当コミュニティ協議会の大きな事業の一つでもある「福島潟自然文化祭」が、平成29年度で20周年の節目を迎え天候にも恵まれて盛大に実施できたことである。これまで継続してこられた方々の努力に感謝申し上げる次第である。今コミュニティ協議会として活動を行う上で、少子高齢化がますます進む中、活動協力者等人集めに苦労しているもの、期待されている取り組みも多くある。知恵と力を出し合い課題に向き合っていきたい。



太田小学校閉校記念事業

太田小学校は、平成30年の3月で閉校になり、そのため閉校事業を様々な形で実施していますが、問題は閉校後の地域の活性化です。太田小学校の跡地問題等、住民一人ひとりの意識・考え方が様々であり、まとめていくことの大変さを痛感しているところです。

太田ちいきコミュニティ協議会で安心安全全部、教育文化部、地域づくり部がありそれぞれが内容を工夫しながら活動しています。私は初めから教育文化部に所属し、その中で太田の子供たちとの触れ合いが様々ありました。農村公園でのミニサッカー大会もその一つです。

敬老祝会助成事業に対する予算も、市側の説明では予算の範囲内で内容の良いものを検討するのかなんとか言っているが、結局のところ予算削減が第一の目的ではないのかな？

ともかく、全市一律ではなく、わが北区は旧豊栄市・新潟市の良さを融合した方向に進んでくれれば嬉しいことと思っています。

三年前から、太田小学校の統合問題が持ち上がり、コミュニティを中心に子供の父兄等と何度も協議を重ねた結果、葛塚東小学校との統合という事になりました。小学校という地域の核になるものが無くなることで、地域の衰退を心配して組織した活性化検討委員会で検討を進めてきたことであり、今後もそのことについて大いに議論したり、周囲の方々からも参考になる意見や実例などをたくさんもらえれば嬉しいところです。



農村公園でのミニサッカー大会

全市一律でなく地域のよさを

太田ちいきコミュニティ協議会 会長

Honma Fujio **本間 藤雄**



阿部 淳一 Abe Junichi

一般社団法人にいがた北青年会議所 第32代理事長



地域をささえるネットワークづくりのこれまでとこれから

地方創生が叫ばれて早や数年、地域をささえるネットワークづくりは、それ以前から重要視され、ここ10年の間この北区でも多くのコミュニティが立ち上がり、それぞれが地域の発展のために繋がりを求めてきたのではないのでしょうか。一般社団法人にいがた北青年会議所においてもそれは同様で、他の団体との協調を求めてきた経緯があります。

地域とは、様々な専門分野の集合、例えば政治や行政、医療や教育、防災や福祉、商業や農業、地域団体、そしてその地域に住まわれる人々といった数多くのコミュニティによつて成り立っています。それぞれが担いと責任を持ち行動することによつて地域を動かして活動を行つています。

それではその地域が発展、活性するにはどうすればいいのか、そもそも地域の発展、活性とはどのようなことなのか。まずはそれぞれのコミュニティがそこから考えていかなければならないと考えます。コミュニティが単体で声を上げ、成果を求めてもそれは大きな発展には繋がりにくいかもしれません。しかしながら、政治や行政をはじめ、地域の各専門分野のコミュニティが縦と横で繋がり、共に力を合わせたときに大きな変革というものが起こ



おにぎりでギネス挑戦

るのではないのでしょうか。

我々の住む北区においてもそれは同様であると考えます。この地域には潜在的に地域を発展させたいと願っている力がある。日々の活動で多くいるはず。日々の活動でそれを強く感じます。その力を多く開放するためにも誰かがリーダーとなり先導し、多くのコミュニティが繋がりを運動を積み重ね、強い結束力と連携で地域の発展に臨むことが、これからの求めるべき『地域をささえるネットワーク』となるのではないのでしょうか。

この北区にはその立地や歴史、現在の環境においても多くの可能性と力が秘められています。区民一人ひとり、ちょっとした変革を繋げることが大きな変革となります。この北区のこれからの新しい10年を輝かせたいです。

地域活動は他人のためではなく、 自分自身や家族のためにある。



南浜地区の海岸保安林

あると思っています。PTAや青少年育成協議会はじめ地域活動へ参加するに連れて、それまでできていなかった子どもの部活動に対して、関心を持つことができるようになりました。

——北区でも進学や就職を機に、人口流出が起きています。南浜地区で活動されるなかで、子どもや若い世代に住み続けてもらうには、どんなことが大切だと感じますか。

——仕事で忙しいなか、南浜地区を中心として地域活動へ熱心に取り組んでおられますが、そのきっかけを教えてください。

川島 仕事が忙しかったからこそ、私は地域活動に参加するようになりました。当時は仕事中心の生活だったのですが、「なぜ仕事をするのか」と、ふと自問したことがあったのです。このまま定年を迎えて地域に戻ったとしたら、その中に溶け込むことができないのではないかなと思いました。そんな時にPTAから声がかかった、というのがきっかけでした。地域活動は他人のためではなく、自分自身や家族のために

と思います。

——川島さんの描く希望も含めて北区そして南浜の将来像を教えてください。

川島 北区はすべてがそろっているところだと思っています。大学や工業地帯や海もあって、区内ですべて収まることのできるのです。それにも関わらず、なぜ人口流出が起きていくのかといえば、やはり何かが足りないからなのでしょう。「素材」はあるので、それを上手く活かすこともっと人が増えていけばと思っています。子どもが育つなら北区。すべてがそろっていますからね。

——南浜地区周辺は教育機関や病院、海辺の森など施設や自然が充実しています。地域としてどのように繋がるのが大切でしょうか。

川島 いま育成協や地域が、大学や高校の施設を使わせてもらえる



ようになっていきます。だんだんとオープンな環境になってきています。思います。しかし以前は、施設のことを知らないこともあって、地域の人にとつて出向きづらかったようです。だからこそ、私はこれらの施設に子どもの頃から顔を出すことが大切ではないかと考えています。そのうすることで、子どもたちは施設との繋がりについて、自分たちで考えだすのではないかと思うのです。

たとえ子どもたちが自身が大きくなつたときに、こうしていこう、あししていこうという考えや意見が生まれてくるはずですが、次の世代も一緒になつて考えていくことが必要ではないでしょうか。

——その意味では海辺の森など、子どもたちや若い世代の意見が大変なものになってくるかもしれないですね。

川島 いま、海辺の森協議会と二緒に活動を始めて3年目になります。以前は海には行くけれども、海辺の森には入ったことがないというお母さん方が多かったです。キャンプ場にはなかなか入りづらい雰囲気があったとのことでした。パー



海辺の森キャンプ場の看板

ベキューサイトや人口のサイン表示、花壇が出来て、どんどん入りやすくなつたと思います。借りなくても利用できることさえ、最初は知らない方がいたくらいですから。

——これからの10年について、なにか言をお願いします。

川島 10年後には、私は還暦を迎えることになりました。還暦になって、永く住んでいける南浜であつてほしいですね。さらに南浜に留まらず、北区全体という広い視野を持ちたいこともあり、自治協議会委員になりました。だんだんと地域活動が広がっていくことに期待したいと思っています。

南浜地区青少年育成協議会健全育成部 部長

北区自治協議会委員

Kawashima Asami

川島 朝臣



地域を何とかしようというのは、誰かを応援することから始まる。

似顔絵師

やまだみつる

Yamada Mitsuru



——北区の中なかでも特に豊栄地区は、最も連携が進んでいるコミュニティに特長があると思います。テレビなどで活躍されていますが、やまださんの視点からは北区やコミュニティというのどのように映っているのでしょうか。

やまだ テレビ番組「まるどりっ!」のレギュラーになって今、11年目を迎えます。考えてみると、北区になつてからの歳月と私のレギュラーになつてからの歳月がほぼ一緒だったのですね。

持つて1年や3年というテレビ媒体のなかで、私が11年も続いている背景には葛塚市場通りで生まれ育った気質が、たまたま番組に上手くはまったのかなと思うのです。見ている方々が一緒に旅をしているような感覚やお店に入ったような雰囲気を感じながらやっていきます。

残念なことには私のように長いことテレビに出ている窓口となる人間がいるのに、北区の情報を取り上げて欲しいと言われたことが回らないのです。

——基本的には域内消費で足りてしまう豊かさがあるから、情報発

信をするのに慣れていないところがあると思います。

やまだ よく行政の縦割りが良い悪いと言われますが、私からすると民間のほうの方が縦割りだと思つていいます。町内意識や集落意識が強いせいか、ちよつと隣の町内となると、心のシャッターがあり、それがいまだに続いているのです。だから、地元豊栄地区の良いところも悪いところも含めて、現実をさらけ出して大きなテーブルに載せるべきではないでしょうか。そうでないと見えないところがあると思うのです。

似顔絵についても同じことが言えます。つまり他人のことは見えないのですが自分のことは案外見えないものなのです。人が描いたものを見て、自分つてこうなのだと分かることができるのが似顔絵なのです。

私が人前に出始めた頃や似顔絵を描くようになった頃、実はこのまのちの人たちには、「どうせ無理だ」「失敗するし上手くいかないからやめておけ」とたくさん言われました。

しかし結果的には、次から次へと表に出てくる人たちが現れたので

す。豊山関、タレントの渋谷飛鳥さん、農業の宮尾浩史さん、カリスマ観光バスガイドのなぐも友美さん、漫談で活躍している元警察官の中山小路たかまるさん、バンドのマンダムのメンバー数人が実は北区出身です。名前を挙げると、北区から20人くらい輩出されているのです。

——20人の彼らが活躍する背中



を見せてくれたり、また我々も彼らをよく知ることや元気をもらったり、またそういう人たちが目指したいという人が出てきたら素晴らしいです。北区の中なかでもっとよく知ってもらいたいと思つし、応援したいなと思つますね。

やまだ この名前を挙げた人たちは、才能のある人たちなのです。才能つて何だという話ですが、実は応援

援してくれる人も才能なのです。応援してくれる人がいない限り、才能にはならないのです。北区出身の人材が、北区以外で応援してもらつているのをさびしく思います。しかし、北区には応援する心意気ある才能を持つ方がたくさんいると思うのです。

応援するという才能すらなくしてしまつては、まちの再開発は難しいでしょう。まちを応援しよう、地域を何とかしようというのは、誰かを応援することから始まるのではないかと思うのです。

——認めてくれる人がいて初めて評価される、そういう側面もあるかもしれないですね。

ところで、2年後には新しい区役所が完成します。地元の人が交流できる、巻き込むことのできる複合的な施設を目指しています。商店街の活性化、人の流れ、駅から新しい区役所まで歩いて来てもらえようなまちづくりを考えていかなくてはなりません。

やまだ 縁がないと、なかなかまちづくりには動きづらいところがあると思います。縁とは何かと言えば、同じような温度つつまりやる

気のある人たちとの出会いにあると考えています。時の運もあるでしょう。しかし、この住民だけでは無理だと思つています。移住して来た方、仕事や結婚でここに住みますという新しい血が混ざつて、上手くシャッフルされれば、まちづくりは進むのではないのでしょうか。

——最後に、やまださん自身のことから10年に向けた目標や意気込みをお聞かせください。

やまだ これはきつと聞かれる質問と思つていましたが、私には「ない」のです。まず目標を持たないことにしたのです。夢も持たない、目標も立てない。ということには、すべてが新鮮なのです。目の前で起きていることがすべて新鮮で、与えられたことをどれだけこなす力を持つていくかが、試されていると思つからです。だからそのための準備はいっぱいしておかないといけないので、引き出しはたくさん作つた方が良くと思つています。

飛び込んできたものをどう受け止めるか、予定通りにいかないことになつて自分の力が出てきて生き延びられるのか、今のところ私はそちらを考えて生きています。